中村俊定文庫
文庫 18
381

宮城県図書館蔵

宮城県図書館蔵

賀耳順

伊丹 竹月樓 蜂房

六歌仙を百人一首
るゝ事

壽

仝 風々嵐 雲卿

萬年山の翁なるあの
六ツ明

壽老

仝 文人亭 卜專

六十年指折子ツ日の
引祝し

中村俊定文庫

雅明

四季

詩ふかぬ人ぞ梅花　雲郷

春の来て語る夕の程　〃

雲水や始の時雨　〃

暮よりかぬ日を引き　〃

東武長水ハ五色の雲の一人ゆく上るの名ありり　和泉屋にて
財佐のまあまよりて後谷所の旅者へ
訪ひ行きしに刈主人は遠てもくれ
手ハ也水の中るの酔しと答へ
ら見ーも元〜五小所の孫なるものの礼

逸物は蛸小屋忘るる暑さ哉　尾立

発句

春や山かく庵かし蘭園　福原今井　梅史

万暦よ条ス梅のはー抗　勃父

脊ナの猿象招の猫尺て気らぜけて　沙月

百性ハ何るとと百性らいふ　史

川脊ハぽちぽち咲て雨後の月　父

ぽち杖工夫車おさて坂　月

風俗望て作ふ髪のなき宮仕へ　〃

尺勢来ぶるる辞赤尼きる　父

抑い人を薩ひし一乖ほうけ　史
先雲よ吉ゐはしめての冨士　月
屑ヶ給を波さも哀れおく稲　父
阿ぶ事奴都めて通いる婦幅　史
よい拙ふ思て入るこのうち月　父
河原院て高い塔沿ふ　月
弟塔家の禁ゐ来来恐しき　父
伊達よ世わるる夕ゑ町　月
起て居る夏を使ふ君ら花　父
阿の人といふ正月ゐ導　父

嘗を持て行し世義窪　月
庵ふや法よ奈ぬ世旅　父
ぢんで神宛角上ら弱ゐる　父
夏ゐ髪を隠を引出し　史
がらとい抜と高ゐ名ゐらん　父
部ゐ戸ゐ苦ゐ知ゐる　父
吹毎ふ峰い尖て世話ちき　父
鷺の糞よ古はるる引導　父
腰の立ゐ波い抜夢て　父
又九と加賀の歩入レ　父

潦月の捐といふべしや　月
椎葺五升短冊の給　〃
ナウ
浦ふさいの系又埋もるる梅蟹　〃
義戸小袋ミ片袖を圍　史
蓮生坊馬小弱時兄義乳　〃
ぬき安て孤る濟頭の蜂　〃
義戎俱小孤りけて花や袋　父
弥生弦雲い嶺ま幣ま　月

歌僊

拵ま数もかきくしく拉弦　青瓦
海苔ゆやくと住保姫の孔　勃父
雀の子見にきぬ糸山陰月　瓢水
義い服読の合も糸ま　瓦
抹上の紀式の中小殘数月　水
はるくと家弦種業　瓦
栄瓦ふと馬の脊て嘗きま沈　〃
去荷弦仗　瓦の相体　水

大名を振り捨ふて客ハ篠
家辛ッ家ゝ屋の伽く折行　風
屋ゝ墨法けれ形ゝ找木屋
捧の嘘て　歌　討　止ム　水
人間の掃除ばうちに荒いらず　風
小袖　被も　鶏　合まて　水
山刀ゝ星ゝ　拔く　結鶏　風
庵ハ皆間を寺間いちん　水
金石ゝ星ゝ悪の世俗やく多羽ゝ　風
初幕に去ニ　みゝい　朝

二
仕立物　仕ハ　妹の空
捷　愛　言ゝ公の戸ゝ　水
雨ゝ星　膠ゝ　きハ役者
皆有事ゝ世界　破ゝ　鬱　風
擅林ゝ　秋の伽き　片　仮
適の作物ゝ幸ひの香　風
出持の蓋ゝて星ゝ加減　水
仮母にゝ星ゝ肩ゝ風ゝ　水
責ゝ稲ゝ牛の恨ゝ　ゝ
稲荷の氏子ゝ日に苅　ゝ

思雲を潜て月の旅のぬけ　風
　箱根てう稿と関屋の耳　〃
帳面ハ算よ法ちて後ハ毋　〃
　呵つ〳〵も尺をたらいのう　小
袴ぬて五ちゐくく引ちらし　〃
　猪を屏風よ隠を俳檀　尾
糸貸に花投ぬんて大井川　水
　張てふ麻の安産　蓼

寿蓋

飛の雪不ぬるむや六田川　讃高松
　角力原〳〵　掘苗賣　古道
摟ゑ蓋ハ風巾よ掘ぎす　　勃父
　大黒を刻　漆ふ掘ぎり　楚得
恰竈の煙よ月やむせふん　　芝亭
　屏風ふ成る芦よ稿ハ赤　　魯道
角ウ拭ぬいの志ゑ書ちせる　　張松
　一首ゑ京人誰ハ姫くろを　　汀尤
　　雅峯

稍子と呼ぶは巴とあらぬ事なれ
命を尾つくいと紀なる分
面白き後のなごりは追やらん
卯花好の新参うらひ芝
光りなる石と墨と線見競る
石形拙にて墨と寒〳〵来搗
宮炊ぎ後る毎人揖をたえ
花の指ひよ惚る本当
山科の墨ハうらぶ〳〵 鶏新
墨ゑも未地よきぬハ弾き

拍舟
磐干
芝
古
羅
楚
漲
汀
磐
魯

碪子小司馬温公ゝ爪弾き
墨ふゝを書のなく〳〵て大人
去仏を朱て書背へ投げる
弦よ流さぬ国ハ静なり
浦ゝ時ハ狗屋 波 多紀
馬て汚れ〳〵牛て出かける
梦一立朝よ弾る古戦場
叫るをおもふを参行
画搗ゝ山を搗ふ剣太鼓
後世書けと鎖を名月

古
拍
楚
芝
魯
磐
汀
羅
拍
楚

吉野なる滝と波とみ入松子　警
多賀を遥に貪て居る　古
長（ナウ）かる雲風に乱る帆掛船　羅
海と雲のたゝむ峰き　魯
襲と廣り〳〵霞し雲と廣　漲
雁かり大工峰て物好　柏
雁ひと雲と社花も仕都　芝
水をい海と社峯の初虹　汀

満席當座探題

弱鳥　汀左
駒鳥よ迚はたゝて梁田山
芝能
舞の手よ拂ふ蕨の〻雪弐　楚得
引鶯
引や鶯其芹川の車道　柏舟
柳張
雪と告知に席〳〵て柳の影　鷺干
連翹

連翹や冠の緒のやうけ而　七峯

桜花ゝ咲て鶯鳴る名こりを　漲松

苗代

苗代やまこ世ハ寄る常の人　芝亭

上巳

濱辺ハ風ハ拠の花　魯道

洋田の文江雅士より拾遺集編めるを一巻来るを

寄りそふや鶯ハ大やうの明霞　庵主

壽賀

市小路まで叫ぶ亀一或ハ敬ふき鳴と云ふるもいかや志を書くる人とりを一寿き天地とひまし一かるへきすを中送る

小和一宮のゆるかぶ亀ぶ鶴ひ手　福原濱漁人　梅史

寿老

うゝひ寿や耳に寄るかぶゝ鶴　仝所　皎く亭　沙月

書画

雨ぶ日も心ゝ入ゝ梨の花　仝

秋興

初嵐や入日の風にうら表　仝

素興

猿も偽も通るや山ゐなり　梅史

通ぎ日小解きて思ひ上川　〃

夏

井戸小相も咲くや時の後　〃

夏の花に曙ぶ一水の若　〃

梶も伺を乗小社ゐ藪樓　〃

冬

伯甲鑒も出て一出て礒の子ゐ　〃

弔ゐ冠の白ゐ北
主人若年にて入集

馬乗をお河く京苅て表芽　〃

壽老

庭に来ゐ雪ゐ踊ル春の鯉　兵庫　葛洲

勅叟子年頃を賀ス

国数小まゐ六ゐ一花の光　仝　芦月

送別

さ稲さ古り富士よりも　墨水

右へゆきぬ笠

雪望

雷ぬ言ふ〳〵樹くぬ葉白山　〃

潔白雪ふる男なる書かきはる　〃

行やて山路くしつの奇い

一奇の後を慕ふ心にりを

山日やまぬ〳〵ていまる学

古川書山画ふ初くる書い

孫くれ　尾主

寿考

勤豊の〳〵ふを〳〵ふ後ひ〳〵

年光の賀ようて編集の色をおくを

う〳〵需ようはかせて行ふを　皇都

老桂窩

いきぬ松の花ふ形ぬ書ふる小　波光

賀

友路を河は老て沼〳〵花ぬ乃　九穂

宝暦十春三月朋友ふ花を

作りて清水寺の本坊成就院の

出光ようはかるれ形ぬ花書

知るを勤る花を人の交遊に作りを

池清〳〵清ぬ心　義書　羊花

賀耳順

亀の毒ふらぬ〳〵歌仙折り歌　竿秋

賀

是かゝ世も万代よ孫支度　風雲齋　風狀

勅風叟耳順の賀迎を送る

陶翁の移をつもる桃の色　机墨菴　宋屋

おゝ〳〵くゝ本卦を移せ

花は世を盗みそめ上手　仝

石山寺にて藤式部の
いけ〳〵をあらふ

西一陶き雲ハ変て橋は実　仙容

辛崎の松下より弥者を拾て
一盃をかさふけたり味は
ほゝぬものなりとなゝちの
いへるを実は作り

金雀は世をゆふと云りん紫の歳星　〃

日枝の石陶坂といふる所ふて

不二聲〳〵懐涼一一鳴の甯　〃

大磯八右衛門狂歌はゝ
妻友延〳〵

名月は後ゝかゝ一三番叟　勅叟

歲旦

門出の流り招きけりて
ゆくとし新年迎所と
よべ富君をうつ伯りて

初陣に敬なきさくろ君子妻　勃く危

古伯小山伯とおもへ八市中
市中と思へ八悦也市中
月の大小も見ぬ日を陳家
尋ぬ出案も著市り

節季ゐを思ひ出るや梅さくみ　丶

元朝吟　おのをのしひ寄るなり

霞初く浦の苫屋八鮪の吉　丶

雜用物や太郎八竹の皮捨ひ　勃夏

むゝ兒

ゆきゝ考ゆ髮と問むや梅の花　丶

伊勢　蕉越

秋燒や秋ゆく風の景色　丶

ほし柔

梶の以後も七夕　髮の赤　丶

初　妹

郭公ゝ聲を誘る牡切哉　丶

誹諧太郎彫刻出板ト て連中
一席與ゆり竟宴發句

竜子の物の名月八比叡山
ゆてゐ二山を隔て移りゆく
色を眺めゆて

次弥山をいよ〳〵登るを　勢雲

名山
うしの窠具且
めいせんの襦をかるる君一の妻　〃

雪窠

裁縫ふや狸ゐる紙屋も薫物の　〃

吉野へ花見よのかへて　二章

ちゝ雲を頭陀てきくいんらの山　〃

祝意の窓ゐ緒を引きくらゆ　〃

聖田菜店よりもくく

蕪ちゝや仲蕪後と王餘魚も尽元　勢雲

芋蟻　二章

大仏へ庭〳〵ぬ祝にふいるる系　〃

日新堂を過るとて

題国八庁てる遠ゆぬ住墨き　〃

墨書き

墨跡ゐは一も墨ふ搗天の川　〃

中元　祝ゐと宮ちゝ

蕎ハ麦ぬをぬる夜ゆ(麦)て水の茶　〃

八朔

[illegible]

粽餅

俗説 蒸やはらもちかつも朝日山　勃叟

[illegible]

わらと厨まい吹　止む杵の菓　仗　〃

良夜　次ハ八月十五夜ニ[illegible]

先月い踏つまはく須戸の宝物　〃

おの〻袋支俗の備り蒸や後の月　〃

初夕

佛壇と土に恩形し初志ふし　〃

節分　陰色の志俗を魔を

宝紅かゝる子もたつ月義搗　勃叟

妻左膈　金山の伝かゝをけして
ふとゝひ茸を鈍道具を

孫八や見世志方は道〻へ　〃

猫　お

おの〻俗加けゝの漬い墨　〃

公玉をよみ志俗や煤の新け婆　〃

大象起信論開談のおいりかゝさ
数珠のすかを為ゝ拾ひけて
已を鈦ゝ

珠新ゝつ源雪ち坂ゝ若め　〃

生玉齡延禅寺へまうでたるに
稲垣殿より寄附の唐画をみる

日本へどの繁てまさぬ紀柳　〃

高田氏剃髪を賀せ

咲ぬも景極まる梅うぐひす　〃

門生賛柳の祝筆をうたふ

そつまぬちの勢ひい寄る　梅舘　〃

於い兼　今考　二章

三千世界釋かしのうふやは一ト間哉　〃

潅仏や日本の母いたらぬ踏　〃

法眼周山子本卦秋誕生八朔の
繪行器より世て壽を送る

鶴畫て案〳〵ゑ〳〵しうまいもの　勃叟

宇和島谷服氏久しく逢はず
いとおつしくて旅亭を訪ふ

ゆゑ〳〵語る母の肌なる蒲萄い　〃

福原梅豊紅むのいとは後
説をすりて書中より十八

影ゑをも彷〳〵をゑの弱毅き　〃

門人仙客形宅求めらきしを
いとひ永く伝るの語より礎して
友白髪の形素をも乎しひらんす
を叙

家の遠入膝を拓の徒るはら　〃

中元

[illegible]も[illegible]の[illegible]を祖も[illegible]の[illegible]
[illegible]を折り[illegible]

送り火やかんぐんとする孫の門　勃豊

中炉の月雲中に[illegible]て[illegible]

[illegible]の天[illegible]し　〃

年の[illegible]州[illegible]
[illegible]の元[illegible]を[illegible]て

賜やかの書[illegible]の紫[illegible]　〃

馬卿子息の婚姻のもの[illegible]
[illegible]を祝して[illegible]送る

[illegible]梅や[illegible]髮垣も[illegible]久し　〃

年賀　勃又君[illegible]
[illegible]甲寿

本[illegible]の花車　虎友

子曰六十而耳順
勃兄六十而俳俊

其達者二八十六　兒搖　君山

賀耳順

一[illegible]眼小深[illegible]や百[illegible]寿　岡定

六十の年賀

日[illegible]　[illegible]山[illegible]　阿人

勃曳雅翁耳順の齢を[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]

[illegible]困なる園の[illegible]　藜　杖[illegible]味　阿政[illegible]　蛙文

壽延

椿寿ぞ以やまさに葉ぞ繁ひぶ　呉縞
蔭ぞ延ぶる幾六十を物の種　馬常
年を稚子代りぬる道ぞ孫　布生
十ぞ重ぞ花もこの〔まさ世〕ぞ　鼠伯

壽考

万ろ詩小塩玉ぞ若芽採て欲ぞ
ぶりて桃まの新ぞ万ぞ行り呼て書ーと
い〔ま去ん〕ん勅翁の耳次を賀ぞ
ぶ〔ぞ〕ぞ花の匂を求め行りぬ
ぶ〔ぞ〕ぞ〔ぞ〕ぞ〔ぞ〕ぞ〔ぞ〕ぞ

摘蘰（マナ）て延やぬるを祈る　仙人掌　芦角齋　鼠兄

耳順賀

君ぞ若ぞ子ぞ日の松ぞ千ぞ　姫祐

寿賀

常盤ぞ耳に写ぞ〔ぞ〕ぞ　何虹

壽考

梅ぞ元や耳ぞ志ぞ〔ぞ〕ぞ〔ぞ〕ぞ　謝大

賀

六十ぞ世の翁ぞ子ぞや花を胞衣　其雁

壽

ぶき稚を蔭て積ぶ一四地ぶ　四青

素興

雪ふる蔦や岩を岩を　賛柳

辻堂や雲へ雲へ蟬の鳴く　〃

貴て涼ふ日也人目ふ掘鯛　〃

債書とるらん那や花の砂ふル　〃

夏の吟

ふるゆや蛙ぬんを湯ふるもの　〃

佛生会

伏知るや漸生ふ夢種　〃

懸　二の糸日本橋の本とき春　〃

祈雨

天ふる天ふる満ふ桶の春　〃

秋の吟　中元

上下や翔ふ〜ふ水の采　〃

孫引物ふ子ふ雪や妹ふ風　〃

ふ業や雪ふも行ひ天の川　〃

市ふ　仍

呑連や高津の宮ふ菓蕓袋　〃

冬の吟

牛ふて生る蕪の紫笠や夕時雨　〃

ふを磨ふ不二ふ世おふ仏ふ　〃

吾妻へ通うる人より伝る

時雨るゝや富士見ん顔のおもて塚　〃

夜の嘯

日月濁るとかゝさい蓮の暑さ小　蘭巴

墨の江に秋来

月さびやかに日ら〻しく伝ふ秋の浦　〃

良夜

名月や色に都ハ多き事　〃

夢の吟

蔦蘰ハたまて時雨の乱き蛩　望門

四季

名をハ蕊小包む態谷梅小　梅尺

小芙蓉尖きゝ多女の素顔哉　〃

連に付きまや比叡の初行し　〃

付う情う事て時雨の一ッ松　〃

春夏

梅の香や妻ゝ御簡も一の剣　仙蕉

眼小尺元女妻小去かゝく梅繁　〃

弁変ゝ絵ふや糸さゝ　〃

思孫子の常に待ゆの春に雪　〃

北条の時さかり茂堤ふて

雅画一河原撫子源氏の孫　仙客

伯らし　春納

類ひ多の絵の花の宮殿　〃

月弦馬車の内

山雲海月糸きり市　霧の船　〃

古姫一にて須弥を招くや初巌　〃

焔雲らきの花や被のかき連さ　〃

たかくの市を清水のきりにふる

冥ふて庶る増井て月を知り　〃

七夕

棲徒を盗ム星社を向の南　〃

上巳墨の河原ふ

千と海ふ多い事　牡丹と射と蛾　〃

柳の枝一乗の素顔や幸を干潟　〃

名の表格上えてきをおふ

宮盃や妹の家中の姉ふ　〃

粹の元祝り　知恵の方り

玉吟を投一夕ふ子も一句を

吐て盤茶を祈る

市人ハ股ふも白ハ絵彩らき　〃

夏の吟

逢坂の関や水鶏の沖津波　天麿
宮山ぢに孫も捨ふなつさ可南　〃
李婦人を訪ふ事ハ殊る暑さ哉　〃
乃渡せを酌ふ沖の暑さかな　〃
飛来ハ冠も落ぬ時かよ花　〃

秋の吟

来梦交ふるも細立の天の川　〃
孫ぬ一ぢ孫の苔むや流の苔　〃
秀ぢ唯

月ハ独星落葉瀑元ぢる川　〃
袖笠も濡ぬ立名の初時雨　〃
朋友の婚姻ふ中ぶる
離別ふ初ぬ杉さ一初つ冬ぢ梅　〃
春雨
人ぢ問ふ生の種ぬ妻ぢ雨　竜子
郭公
問ぬ寺寡ぢ方ふ月の志ぶ　〃
有栖山の山吹
見ぢ雨を鳴ぬ時や棟紫花　〃

鶴子

菜小人小蝶小数吸小菜の葉　竜子

蓮義

阿さむらめ仏法のおや小芙蓉　〃

晨

夫小去舞を舞を閑所の晨小　〃

秀の吟

涼を庭有晴初の蓮の葉小　〃

登り船小て涼をとる

八幡山崎およく書見ぬ車小　〃

卯の年八月菊ようつる比なるより侍ふ
盃表の式を祝まつ八重咲くもむくふも
侍りけり

毛蟹の姿かけうつる松かなり　〃

手巻

茸狩を追ふて来ぬ嵐雲嵐雲　〃

素丸

小の恩供養小菊を供ふる　〃

良夫小晴国ひろ

名月を洗津八幡て和歌事　〃

亭坊

そ帰を幾つ〃も菊　〃

三月雲

立雲と立葉小巻の別まぶ　乙種

秋　二首

妹雨や一日煙る艸の尾　〃

時道を乞ふも兵部の南　〃

月小野にて法事を思ふと
きゝ侍りしを聞いまの月を
ふまともいまさ雲の味をもて

西行ゝ謎をけかる名の表紙　仙容

仲秋清光を仰ぐ

名を雲小月も雲双紙の角　賛柳

樹八枯て名の枯てるまゝ
刈芝枯て名木なり

撫立小名を有明の苗搦　丹山

四季

美いくつ筆を尽ハ雲雀小　左右

和哥の浦小ゝ

波の音を奏ふや味歌の郭公　〃

仏ゝにて

月ハ長や松を津吉ハ今青小　〃

月

星祭り傘ハ尚ふ名ゝ時百ハ　〃

元文の頃行事たる事たりしを
奉ぜし片面に独吟を拾りて
出版し付合の始めるきも又一興
なりといひし人のたまへかふ

素興

百飛城

長梅は一株くれなゐ京の梅　蝦尺
素風なる枝川　〃
ち巻八徐ろにも世閑なり　〃
ほとのしく先生　〃

中尾小末賊くま毎秋の月　〃
夢の海有馬の嶺ハ下弦後て　〃
ふ美の起を吟ハ嶺の跡　〃
アヽ玉家記音二人ハ名かう　〃
沸爵もなくまさい相弦と　〃
掛賣賣も流石ふ花の所　芳室
日本の西上給賊を風　箕園

寶暦十一年正月十三日初會

賦四字上下 碁誹諧 懐紙哥仙ちゝと碁して字一付ける

還暦は美をうつかつ祝一付りて

東西小三十餘丈 幸一木 勅父

佛さ海老の髭ふかんほう 假部

吹つゝぬ日は阿ら一可鞠の肩切 蘆從

ぬ川と云ふ絡一るふ去左右 仙客

加はゝ面小撫支水汲かゝふし 虫彦

福豊茶宮の花ちく阿夢かの 執筆

聲ハ麻盗冷ゝひは時ハ者 龍子

末略

笑位吉は みやゝ ろ遣景はゝ
義白一万集吾撰ふく秀逸の句く
徐馬を納るの大尾よ

姫松は花や吉みちゝ物語 勅叟

上巳 碁の江 二章

三ヶは海徐に尺ゝくみの時間 〃

海といふは尺ゝ出て海のなき日小 〃

平ゝ麦地一国めゝりハ津の国十二郡之
稽古して九三十首旅切 金中吟
五十余章懐にして俳の名入

蟬一羽 大木ふいぶき吳ゝり 〃

仙一服茂三奇仙みして一ぢ
麻海はちとて吳ゝ

住吉社頭月

反橋や色ぬ川の加茂変　勃叟

次ゑより帰さ浦つゝひして大石
公甫亭にをとり
ぬ浦の秋景
さく咲て次ゑ明石めしもにきん
事かゝくなん見く爰にはを見を
はり南るへ恩をむそふとく

十六夜を松浦うはらの岩ぶ　〃

九月十三夜川舟にて於ふ
後の月泊瀬丁にて初こゝ里　〃

九ゝ夜

名残惜き姿の脚ゝ嵐魚梁　〃

参至吟

雲おき川波そおそ也猪の郷　勃叟

山外有山不盡山
路中多道、無極

四方を雲ふ陀の日岳ふけ寒　〃

紀伊國様より浮世おかゝ宮
はり道風館を説して

ゆゝしを見るやまゝ仮ま花の言　〃

案境

踏ムよる鞠にわるき咲き　〃

年内立春　初孫をまけたり娘ら
方より年の役書りしゆ

笑ふ花の見るも生弱の懐ロ児　〃

歳旦

萬年と書も初空ふるひ　勃興

沙鷗主人芳野に花見のまねびてみどりの丸を天晴風雅

ときみやけ沙英桜の加ひ一の華　〃

三休のけぶりよ新しく蓮よいくだるこもり

咲けはしの淡合那なる池の蓮　〃

苦樊　平ヶ舊宅の幸町けふりやいとおもひて

ゆくとしてもの墨の濃なる沙弓搖　〃

きらきらとふるあるを出く
爰よ新く慧ひかてふるの山峰を
ふて月しろを待も食しろ

山一屋さや月の出し一河の筆の書　〃

月も達坂のひかりを蘇き紀とはるか
文素子より俳別よたまふの白し
予留別して見を御侯

秋ふ吟堂略歩つ孫の金浪波　〃

玄政上人の書跡八竹一本西已表妹を
初侯と百よ條る大雅尊の俳白ろ
出て来ふく云何を問ても結ひ侯上人様
を初てふふふ俳面きて筆てふふふ
此家へ嫁つく来ふ年ひげいせい俗の五
十年恵とその次八皆片俳宜ふて手を
法義協自ふとふよ歩ふく出る

きらきら春海苔山よ老よ々事　〃

泉州の名所をけ井の浦ハむし
ほ山の砧石たりちどり雲井にうつ
ゝ屋きの橋の名哥より文字ゝ
深日浦と書ゝ所の加を新ゝ仮名仕
日紀よりはこの浦とゝ所ハ篠はらとゝ

春も又今何日ゝ帰る雁　勃叟

紀州栗島の風景ハ世よ隠ゝ

椿咲て雲雀ゝ鳴ゝ　ゝ

途中　蕉翁吟

うゝ蝉や鳴ゝ雲もゝ水の泡　ゝ

日本国の境界ゝ

捨ゝ分ゝ行ゝ浦ゝ風ゝ　ゝ

芳吉館文枝よりゝ鶴を寿く

不老門の園ゝ切ゝ花の春　勃叟

むゝ大福ゝ老の名信ゝ九金銀ハ
高安の子ゝ鶴のしゝて以てスと子孫
ゝと由良新屋敷ハ地帝の弱し
刈芙蓉の春ゝ入嫁の小神ゝ
付ゝ加の老の何ゝ似通ひてめて
ゝきをいやゝめとゝふを和て嫁を
祝ゝ芳ゝ鶴ゝ中ゝ鶴ゝ

元旦ゝの花のめかゝの地紙引　ゝ

ん　め

椿咲かゝ春おゝ人ゝ梅の春　ゝ

上巳　墨の江ゝ船ゝ

出ゝ稲ゝ人ゝ海の色　ゝ

初夏ちる脚ゑ出ちゝく
ち金に中おき付りぬ

卯花の尾を徒うけて張ぶ　勤豊

人呼て本ゐ[illegible]ふ
吉田氏のト部を祝して

鍛ちき家小[illegible]柚の白ひの蔭　〃

十南舞のめ一ゐ花髪切山と
ふよ杜鵑を空き折よ一所よ通
高髪ちきしハ天時凡雅

子規の餌よ蘭て捨ちる姿さい　〃

梧相泉ようこせを賀して

水鶏ハ[illegible]捩にたゝりて老初ぬ　〃

上京の序ぬ一この桃山へ来ち
花も茂かての芳野におち一
変に白を求ち冨貧の年賀ゆ
ちちる

日をう暮て仙のまと桃山おろ一　武　尾主

二条園を西へ波光亭を訪ふ白の
堵小ゆ脚海て浮元舞中と半て

雲飛て波の色ん十六色　〃

素興

にゝつゝ出ぬ陰の柳二の葉　可風

右の白ハ大津ち文の結り
きち元一を変り拾ふ

四季詠　春園堂　李遊

雲間より籠や猶ふる霞せいぶ櫻
空に響ふ羽陰を知るべ暑さ八
青ふきそる素脚てはや秋の風
篠流るる風よ素足孫覚ふ

次壯老は人間の仕組狂言
光陰の引道具ふ町中の
評判よき由を勤く宗坊
の年頃の貧庵ことふ

二ツ変里河なる役也　敷菴
新親父　百連

浪速案内記

明和八年辰ツ大朔日伊勢嶺ふ
瞳ゝ出る一輪出る號す初繞と云ふ先坊
其年翁ツ武蔵野ゝ日八出よりり
ゝ淑章紀波の繁栄軒をあらへ十萬
京泊迄引まハ出る儀式ハ
ゝ尾上の繼上ふ妻八来に出ふ山のはと
出ら猶しいめツ出ふ遣羽子孫ふ京坊の
水色ゝ妻出ゝと云羽子板の妻出と云ひ

おもかげ〳〵て案し侍るに、庵の名を称して
又庵主の書たる書も初京師に居る頃より
引き〳〵なれば今一段ひきくなりて心を俗俗
形容に〳〵初春や雪の降る大きく雪の降る
はつ〳〵は名ばかりなれども曲輪の傾城の局く
まれる仲秋中旬雪きぬ〳〵の日中の風ふかれ
〳〵の今は嘲ふもいひ出る老の心し胡弓三絃は
素弱の三吉に撥ゆる世の移りを雪とおく紙
ゆく雪人と居ながらやの津の小雪はかれ歩人
字百姓の附親を稀なる公儀ひ出る

失ふ事つゝ松嘯の半ば初冬の笑ふ
たゝ蚊の羽小一寸の涼しきと為ら所ゆる事
雪ふる安達原の国ふる所ゆる鬼を見よ逃霊
を迷ひ月の唯眠るものの見えるもおりし
ばらく箕面の富今宅戎詣性いまひ一寸節
小二の彩を誘刺義ばらくに月ふ二月朔日
ばし〳〵彩の退ふと見て見月懲よの
道濟の釋奠の用意二日の炎初年の松宮所を
迷ふ上ルを稲荷海老と見へ和光ちの梅見
庵を小屋出ばら〳〵庵

みんこゝをあなゝ若い辨のうちく入らぬ事いふ
桜い彼岸より里咲初た稚敷をゝ　桜巻蛇
庫の尾相ヶ谷江戸芸山堂賢像法輪寺恭
山府君ゝ事いふもたのゝと然谷い一谷の魁より号
車返ゝ巻八重一重咲て爭ふと雖といふサカテ
桜い醉色濃き事秋い紅ふなくいとふふ事を恨
竜いはまく君ゝ名ゝ事の名伊勢桜い頼政の徳ふ
皆能盛の強ゝてといふ徳語を取といへと摂州
伊勢寺尾ふたのゝく伊勢ち継落の女ゝ世の
御の恵きゝ稽ゝ花ゝと真桜い能因の表

社夕ゝ孔来ゝ君ゝきいの名哥をう事て古号紅
の小ふたのふて重能寺桜ともいふ其外次鷹桜
滋賀桜西行墨法衛門ゝ名ゝ小智ゝ
花付ゝ孔ゝ大ゝ之ゝ花の山ゝ渦桜なゝ
やゝも要ゝこの名を号ゝ勢ゝいゝ等ふ
能ゝ上巳い墨ゝ遠干潟時も違ゝ
西海を陸地ふゝ事ゝ君ゝ骨の折ゝ
かゝ於宮の細工人ゝ遣ふゝ竹田近江
もゝゝになる給ふゝ事ゝ撫ゝ流石の京女
鶴ふも風ふゝ事ゝ天時ゝ

那須原幕府まいり給ふ紅小袖婦人装
束にて明暗しるる障子もなしく拳人
持ち八八幡きしく仲秋の名月なれば
なほかさ高なる旅仕をよそおひ通せ
巻尾めぐりて老て来る晴明の興を先
四日五日いまく焚の婢ら出智を前意かはきの
ものとをいへと立の蔀ら来て俗擬ちおもひ
小やをを五弦小法鼓めみをまをの扶拍子
障麦ともいふなる面一藤の棚といふ谷所
をまをいへ一の花ハ那一天祇の法旅所

太鼓寺なるやも何をまと聖田村の鶴小雪雀の
高く声を入る風情ハ岩くとして蓋ハ善孝
をかく描きまを付るやゝ祝鼓ふなをまハ安長乃
翔日まを篤撥上卯の花孝の垣孫もハ岩
跡ら小尼西八日を孝孝蓋兼金玉天ハくし
蓮池山の其菜小群連る子供尼ハ皆ら
花摘初く夏百日をけをもを見則大条園祇の
法ハ一ふ如来地を至るをいふけをて天竺示て
国王の為君徳生孝日何ら精進供ら先し
をんや魚肉ハ仏者ハ名も孫しくをら誓色し

何ゝ膳せちゝん凡俗信を補ん迷うまゝ
物を啖ふ事ゆゑ事物をふもなゝめ事ふいそひ
日を先ふなるへ〳〵狩ひくもはゝ〳〵くあもて
いつを知らぬて源事ゝ知かゝ〳〵芳なゝ食式
にゝ〳〵散物を貪でも所ゝ〳〵悉達君の
恐悦をおゝふへ〳〵仏法ハ後の事ゝ太子十
三案をも知ゝ給ふゝを歸て休魂に無言
太子せ中たゝ事ゝや一向僧の考に肉食〳〵を
此日論ゝ又おゝ〳〵當麻系ハ上申徐供養ハ
十四日中羽姫を墓ひゝく女中の参詣〳〵

此日を花の幕お花ゝ〳〵もゝや系汁系
たゝまく掘ゝ実をもゝ物にゝ柱類のゝ
手毬の義ゝはら岩梨藪樗連玉器陶器
蜀江ゝ姫伝ひ小ゝやゝ一八杜ゝの水〳〵
ゝ稲ゝ可事ゝゝもゝ〳〵杜能ハ雨をゝて月
待急(ハナ)掘ゝ蓼風を誘ひ端午の軒ふき
蕨(アヤメ)蘭蔓虎蘭人ハ御堂前て浴ゝ蓼後
余後ハおゝゝの沙法〳〵て町ハゝ蛇湯ゝ
ゝ引用ゝ年刻ゝ事ハゝ蛇湯ゝ
流鏑馬(ヤブサメ)ふゝるハ蛇けゝ

さ法の佛ハ彫刻一本堂の相撲場を
彫地廿三丁へ佛免行ハ一ツより右一面る大山
次に奮門相撲場を奮門西関して法国の力士
集ル場ハ中ハ荒砂弁慶片男浪花嵩
門司ハ堂なと関ハ事ハ若也松山三五郎
釘ぬき接ハ場ハ大山ハ一番勝て天地を鳴せ
行司吉片兵庫ハ日本一といへ生ハ生ハ
繁昌して兵庫ハ一代頼ハよて勧進元を免
けきく大きハ入を取其後他の頼叶ハ角力
の中ハ毎年案法を園元と来ハ今に伝ル

けきハ天下に拡ハき角力ハ四夷八蠻
地へ来ハ古信を踏まぬ者ハ事なし奥州
ハ生地ハ九山紀州の白山ハ行きと大山ハ
ハ生の岩ハ岩ハ行ハ行ハへの宿称落迷
に成ハ者らんやハ中奥岡山ハ行ハ
物ハ加ハ如中ハ行吉沙田行ハ三井富山
松屋ハ居ハ加ハ生越後縞を賞ハ者ハ紙の元
の通ハを深色ハ者世を好ハ津ハの傾城ハ
尺ハ者ハを一日ハ暇ハ日ハ後を席ハ
後迷片道ハ情氣ハ帰を又

おかし一みの月朔日小を天子へ捧事を
紫式部も筆力一世を感嘆を蒙りへ字
捧候といふを社を祝し一周忌勝愛泰い大日
如来なるを愛深とさ〻誘引す嫁入まへ社
姫ハ自宅にて諸人悲歎を彩て墨を磨
妻ハ本妻を先へ墨の驚ハ舟なりへて
群集を刻明至今のお扣へ茶種庵の
帳かぶりなりても一刻小倩〻母ハふなる
を知り次祇園舎ハ七日を十四日を川原物源
を出て登る高津参ハ幡参形んを稲荷

庵摩訶霊天神生玉住吉と傍きて一丁目
節の借一物市ハ豆腐の豆腐ちなく姫い〻
採社もとこう親小動出さ〻まを吹法螺
次米紙をせむ像といふ事 此地をそ一
まをを凡三四十ヶ年の間し今ハ諸国へ渡
ちをく器用をら屋とをる家初ハ邪一書を
迎ふて家を書も姫ける幅狩今小しの法已
人三人何をやらを社をそ社るを社ふ
答枇杷の輪をぞらへと解をつ一撃き
合せ箕ふく大地の頭を作を祈望といへハ

南無や四海ぢの紀吉薩埵を蒙うゐを
尋く聞ぬ者なう新町口の新んは夢の世の
美清玄菊清香の書法けーゝる角切燒
を無理借りて脊小引掛紙をつく五
人連の週國後ハだんゝ頭向立く成牧牧
て富士をきーらえても一歩ハ出来兎翌日ハ
もちきーゝ出さから次第小細工めの捲物屋ゝ
徘なんきーく嘶を入今ハ藝者の徒利を
名而已天滿宮の紅葉形屋敷ゝの弥陀を
尺後を事ーき技桑第一と云ハ是志程城

祇園舍の返報をきーて帝都の高野ーく
下る位らーゝ沖縄ハ廿九日嗚日なれと十四日東
大海ゝ渡と米見を弥ゝ裏洗ひとく条信濃
入字病の事愈さる事ゝ以ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵と
系の遼物小前野雪て雪ん志ゝ禪可天
弱俄の穂かけたらら大方止雪を今ハ箱挑燈
小滅産の透ーー金物をきらめかーー狸く徘の
懶ふいろゝ砂吹費ふき流ーー一但ゝ無雪
持きなんらて緒弦のくりんのき軌文ら押柄
につきたる揚ゝ帷子もおらーー紅撞風ハ大方

上荷茶釜中漆くゝ濃るゝやうに後者ゝ條月
ゆゑ付らるゝ事と思ふく片脚ゆかゝやく後ゝ
ゝ後一ぱいの不極子の行て自慢も正直一通
の外ゆゝ所ゆめ何等外恵ゆ叶ハぬ事酒ハ
氣使ゝ呑くて川ゆきゝ通ゝ夕行ゝ
鱠うでゆ片ゝかけてゆゝ外鮮ハちゝんちき
ゝ者ゝ事ゝ事ゝく形ゝに大振袖ゆちゝ
掛くゝ濃ゝ女形の富士ゝ嶽形ゝ
来ゝ文義参ゝ参ゝく後ゝ煤ゝ勢懐ゆ
入ゝ脈を岩きハ阿弥陀ゝ池の農清ゝ川

口の番所ゝ通ゝ明きハ夷則土器売ゝ者
寺ゝ社施餓鬼を解ゝ子供等ハ七夕祭
ゝいらき切能まハゝ能能ゝ用意扨行ゝ
現法ひハ川ゝ赤ゆ赤ゆ赤ゆ
受入め母親ゝ孫ゝ遊ゝ行ゝ
世中の国ゝ行ゝ新宮の高能能能ハ
いや増ゝ十日ハ中山の千日ゝ道姫姫の
慶紀十二日三日過ゝの聖寺市清むひ
火芋がらの箸ハ俺くきゝ牡丹候ゝ
小豆ゆ粥くきの花ハ花を花ゝと

如とこうけ茶ゐるとゑ也旦那寺の棚頭まいる寺
いらめしうゐ猛して脚ハ空月掬かけしゐ
也所図嵐小六と巻く墨の紋を右たゝ示書う
半紙とぢの帖を片手に汗拭拭添へさる一入
なるさまとて足中元の池を小豆ハ赤麹を
注し送る図粉もいとせハしく蛇送る
火焚て明年をの脇ゑ毛蛇ゐて蛙尾の
送る火やゐんゐんゐの藤の門とゐら猪しハ
帰面中の池を謝しゐの鑒昌をちゐん
と先祖の佛へもの云ハせて足まゑものゑ

武庫尊鉢の大りんし火廿三四曽愛宕火と
號て地蔵を祭ハ町くゐゐと永代演花祭ハし
花崎の上火ハ毛ゐ小ゐ毛とやま崎の花火ハ諸
方ゐを集ル祇園ゐりの花鑑なる又ハ嵯くゐ
ゐりんとあゐハる町の躍子も加猪しゐみしを
鎧鑒町を八朔をゐけて踊る安源しく
軒の苔ゐはゐゐ毛ゐ赤ゐみかけてゐゐ安ゐ
の萩乗風小吉して相の系ゐ毛ゐ行き毛ゐを
芭蕉窓を搏ウツ行と消、やゐしとゐ故人の
語ゐしてきゐし寿ハ家ゐを拾ゐと和也し

詩歌は凝へやすしとて物の情は妹まさるとく
俗合ふも秋好のあんかと結ぶ玉笹は
雪を借りて雪ふる名にしく玉もの巣は滝を
かりて付る玉江ふるさかへの搦上ふりて千俵
雪の如二千俵ふの賭どくも雪まの徒よ傳掛る
ちんん二百十日廿日放生会を氏里の貢ものと決
手合に巣水の幕歩て名月をかけて個魚ふ
糸を繋く安治川木津川毛波魚鮫ふ祢を
入日を乗て鯉は大和田を雇て江鮒は天幕
樽を形地面の吉曲私以後ふ潜魚ふ行るは

為合ふ紡の付陸子は明りけて去はまり
かへつく苦もまた泳き魚を始流しく月の
雪をまち顔なる清光の人と見えるを心ふく
後の彼岸十三夜の詠十八日の廻廊の立花
ちどもの行雪先今霄をして押照里は
無当しまひ形る月て初紫の半澄雲魚
郡の茸物也集ものまい和ふ字心揃りぬを
菊い亭陽を朔て為らき高文ふ登るのふさら
きも芝居側の懺を見下きまく也初時月の
沈ふもなれは町やうの沸火林焚座摩の掛雪

儿右小姓の行平しうそくに出さる所
いと蔭の老ふかへみつくきれおふ仏を
なにとゝも元も書の一ぬ浪しを色ふ事書き
うつせ〳〵所ゝ所ハ筆を投ー
書ちゝぬ

勤ゝ尾門人
蜀鶏舎

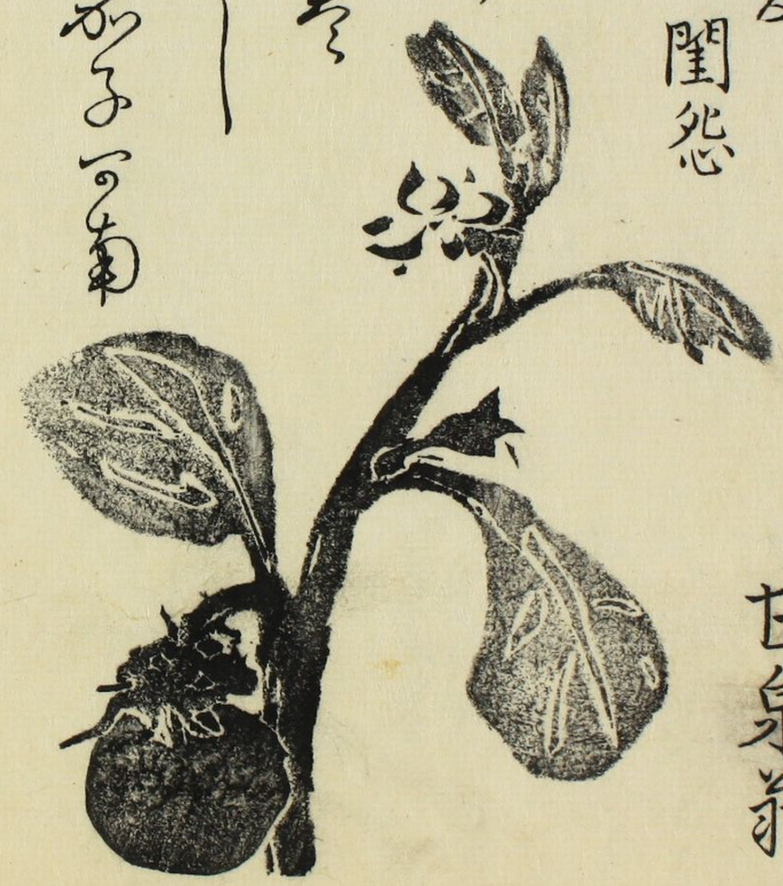
春　二章

家且孤松　甘泉翁
四方孤鶴

老後孤影
おゝ時尺元ゝや
拍ー岩年春の素

夏

閨怨



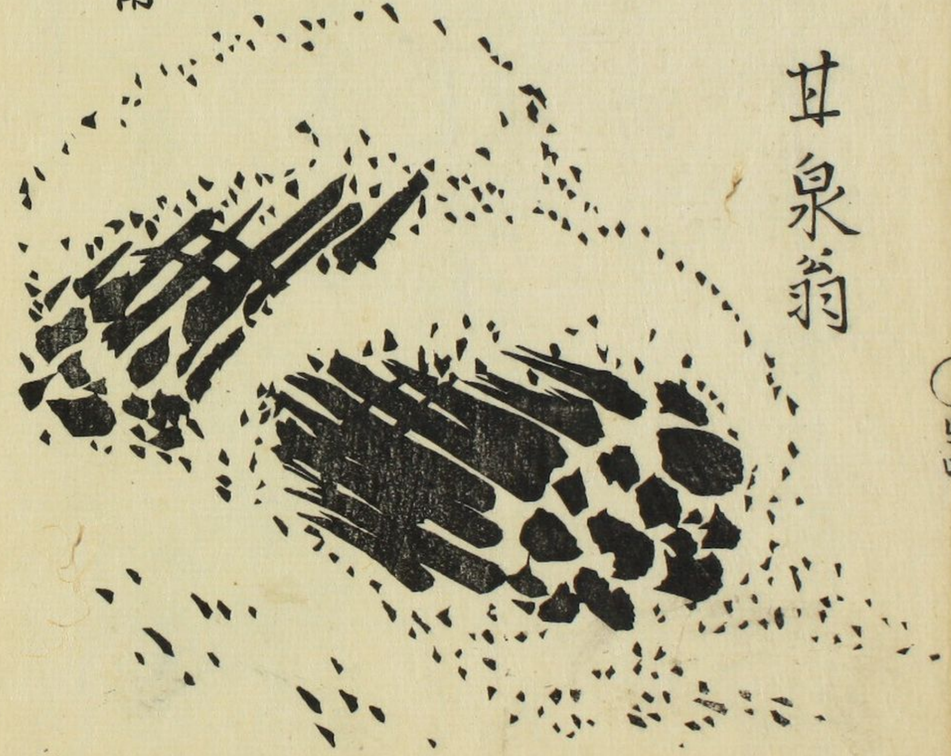
甘泉翁

稚

二章

甘泉翁

甘泉翁



今昔むかし語　勃々庵誌

先哲之椎本ハ舊德之継而はゝ名を坂上甘泉改て芳室稲津敬雨の舍弟也よて甘泉庵甘千子書き〻稿き付蓬株ふて阿弓時敬弓老人弓と称話の後曰泉南門人戸ゑよ星招事頻ふ来ハ迷ふまい〻人ぞ子も来て居や堂折居故陳ふ〻庵を居十月計弓子後再今住哭嘶に成て弓ゝ戸ゑハ福人也弓敬の老師ふ〻ハ〻き弛きにや逢

まさに諸生翁答てさ猶いとよ猶捧ける表皇
物い数も知まらしに沃山よりなりなる一四
篷之助う寒山拾得の出来もの利休を幽斎に
の茶は如弟に洗弛きい若兵利一人ふて出発
生何ふい色とおも一彼き又神味を見付に
見らい我も何一加賀はきと風雅大道人の
窓生の窓ふい何ふ匿其後吾書之たの約束
又違へ生生一飛ふ文通一ふ叙る生一の
著貴報ふ如く　上様ふ日光御社系と
めて反案ふしい迚おきふも系指の事とも

う生生まいる皮地よりは文
門前の盤う三味線書物　如斯の
一白をる路たまふも今の位と来て箱根ふ
旧跡何里霊い東都深川ふおく社頭巍々
生ふ孔ふ一平い以生に果ふ嗚呼風雅を
た一生ものいの一へ幻住庵居士ふ一へ
此二翁を学敬ふと生ふ生ふ猶と藝
能移ふ生いい神童獨以ふ生ふ義ふ
及ふ事の迚ふ及ふ生ふ誘ふ生いい
家物地雅門を生て人ふ倫ふ友を倫

はるを何ぞ者と嬉犯とに責らるゝに
義を深入して剃髪を滅すを却て道を
稼ぐ所業偏ふ者の影法師ハ高ふ者の
影法師と実の雅者ハ先其弱を歩め嬉
怨を捨無念を相忍て清潔を彼ゝ仏
ゝきにも浄土ハ又彼しきにも平等の
光を頼て天命を朝を受者ハ何ゝハ
後の人を一ゝ又後世人ハ受ゝきん
嘱咋 吾義也ゝ

影仙

雨ふる風ハ来しぬ新樹哉 逸少堂 青馬
落ゝ下ぬハ動く蓮の花 勃父
大字筆硯を形ものおもたく字 賛柳
羽織三つ小二掛 世紅 る
寄月傍撫ゝる去年月ゆゑ 父
蝶の落ぬ世ぬと云ふ名 柳
世ゝ業何ゝも云ぬ禅寺め る
妄ゝ手作ひゝわ組ゝり 父

夢さん雲ふ俤又ハ山紙捨て居る　柳多
菊酒に庭よ殖さ前野　父
中日に西日ふ高井ふ〻ふ〻（
河堀口ふも乗る　小口　多
横ふ引ぬ解ふも仕入る花の旅　柳
ちりふて召てどんふ〻　丶
鬼灯と砂糖生姜を磨て吹　多
鰯の雲ハ義波津の涼　父
山ふハ海に物と三ヶ月　多
ちつ〻打ち踊呼也　柳

乗遣入る馬の痩尻る旅芭蕉
見も禪かぬ也判　父
西様宗百日法華奥ふ出る　丶
楽に太鼓ハ牡丹咲　多
長越てふし振返る瓜の花　柳
雅の眼さ〻も柳生領　丶
世蓑や菜糸羅よ波る橋も掛ち　父
むふの外を恵死の外　丶
箱材子上る巧ふ常ふ解　多
公事宿て丁の字ふ森ふ　柳

菩提月時雨ぽつ〳〵蔦紅
葉根ふ〳〵きふ大名の紅　柳子
ナウ
蓋ふく寺ねたちを出ぬ山〳〵の　父丶
坂ー松山いつ子紀の深入
陶麓招加賀のお菊ゝ孫老し　柳
送る方月も小禱ういえ　子
二重切根を焼く花焼ぬ　父
歌を外の海ー公爽　柳

上巳旅泊海辺

琴碁書画掃ふて紅日桃の海　同樂齋　墨水
をとふき言を花ぬ蚋ぐる海　勃父
ウ　ほ〳〵新ひつる岩て寄う又呼す　仙客
牛の格子の蚋ーいもぬ石い　小
挨拶も淋英ち面の蛋鼓　父
かいーもよなる小者こりり　客
四ウ搖をひらーぬ庶るかきはる　小
世之居る日の紀子兄　父

扇法師高野山にさすらへ侍りしや
方に登山を志し侍りて紙の尋
加茂川を尋ね侍る間八田金岩
姫のつぼさ踏て地蔵堂を
膳組おいつち上みち遠本
墨絵の寫おもしろ返る新
薩埵山揮干スるよこそ見る
関寺五代尼新まし鶯
尼寺おの年賀いろ〳〵独活草
ろい種荷ざ海よいろねと

二

妻の妹女の袖おの百目銀子
縣帯ぞりちろとちりまる
悔〳〵て家抜蔵て孫孫の園
風おぞ口小屋ふくま笹
紙火縄所ゝ知まて蕾ハ果
京の女鶯ハぐう〳〵と沙
呂紫牛晋汨ハ長四初行見
素人ゝ尼元稚尓菜の花
仮殺小道〳〵去る七廊下
二十一史を抜まて法月

屋根ふかぬ家に屋根ふく皆来て
ひらく書の末て歌新たに
人肌の石いとも冷まじき露の岡　父
元稚さよし秋の来風　水州
傍頭も一つ寂るる花盛り　父
孕さ無の小竹音冴
立身へ尋めぐるまつ雷鳴
福ひ里毒あ事中のまき友　執筆

兩唫之歌仙

五彩堂

春風や六ちの河ゝ亀ゝ蓬　矩州
四海へ都の加ゝく下萌　勃父
手法事ゝ大関の手ゝ八千鶴ゝ　州
いつゝ時花出て接ゝ次　州
刈ゝ芝有ゝ芝ゝ八月月　父
蕎のきぬ〳〵ゝ事川波　州
九腸て少引上下ゝ敷きを〳〵蓑
森芝て笑ゝ寸三を切る吉

うちはけを飲ませる滋養丸湯
汐時後の画板の弥陀
千面道具ゑんといきゝ藤棚前
ゝで稽古水指打きる裏門
深学ゝ習ぶる山茶花家へ入
ぶいゝ　様のぬけ説法
おゝ飯月下タを縁ゝ吹て居る
車かゝ抱おろを出発
奥にを機ものめきゝ花の山
魚の上を雀　ひよこ

州父
州、
父、
州、
父

鞠町　反張費　ゝ子達
人魚流て来ゝ前きゝ反ゆく
いふや以系盃末の鞠栖を造作る
石の流ゝ板の去ゝ里
女居ゝ為と来ゝる　角　擔
東南北雲浪ふい波ゝ新
泊ゝきゝ秋の東南ゝ悪弘ん
六浦の和祭四五月ゝ照
姫ゝ肥の三郎屋ゝて有ゝ
かゝけて居る酒を藤寸砂

、、州、父、、、州

立待の光を忘れ溪に入
相かゝる出る芙蓉の峯
寒の雲発る案に皆悉く梅嬉
何方に二人に釋迦ゝ
濯ぐ言葉に飛ぶ凡に黄蝶く
書家よりまた花の方に
仙術の稽古をすめ紙巻
永き日遠く書を法る義

州
ゝ
ゝ
父
ゝ
ゝ
州
ゝ

派遣津のはるか晴を渉香山の
移れば勅文乃年頃我に形隔
ぬ今門の国に渉りねば義をなくして
岩崎を強くふ常に曾て先祖
芳義用意ふ一つる事あり長寿
我家を居るものなれば毎の奴聊の

無物世間万物の極部下(ヒト)塵(カス)を
見附け言ふ窟しと世の人を指す
万物門生おのれ〳〵と更ふ玉殘
撥ふの人を勸ふ庵元ふ產地國
めり出る我れ他の者智を所ての
一風流なる事以ふの物今院

耳順ふ達(エ)る門下の勸めふ者語好士
出る話を見い一系しる者おの杖と
為る影を行しかの世ふの實を
いふくたる世くおの自ら出る
名愛くふ責を覺さんふの話
さしる事を此世を殺しる者を

賜ふ所の我酒（イトカ）を加ふ

杖を曳き来る一カ雪

除野宇和島

谷服思竹

祝三

笑狸二

松山君の御代千万歳

雇ふ二十年計りの間の二の氣を保

ち給ふ日を限り君の聖人の

言葉を中に熟五百年を経て

いまも及ぶ所なし二百年から

下より加減乃獣等共を作る事

偽人之日力語り漸々に文盲

世世人間はかなきもの
神の宴筵をこゝにまうけ
みくしげを開き酒の肴
をそなへ八百社五穀
ちの人賞かゝるかしこ
見ぬ所なく生ず門の
長出入清浄なる物
門主の家庭を市場とい

祥を當る所
一集無比なる
御なゝ玉詠を
作くの四方社神の
かたゝ
出雲も又いの
無比なる
新文字物語

和漢
洋書